

門へ 13
 2016
 巻 4

大通俗一騎夜行巻之四

大通俗一騎夜行巻之四

志水葵十述

托蘇と園の花よまをる姑獲鳥

嵐よむせびー松とふとせとまをる新よまをるれ古に
 場とすうまて田とありぬ子形とふとふたうありぬ
 うのうとまてうとまてうとまてうとまてうとまてうとまて
 脊中に及びてとこれの髪は揺とたがうとまをる現世
 の人乃ほの葉ようふか産婦とて雨夜のつれくよ
 嬰女子と抱ひて人よまをるふと抱ひて下さまをるおけと
 海交りのつれとまてうとまてうとまてうとまてうとまて
 うとまてうとまてうとまてうとまてうとまてうとまて
 うとまてうとまてうとまてうとまてうとまてうとまて



を形もせしむる人抱ひたりあともんまき石仏の抱と
おせつりと流れどもはるるりなきせよ有化おま
そ家子と人よ抱せんと子まよふかゆま多くあそ
うしそ家業と燕老とま又踊り子と必く
舞の吸おの影は混じらるるあかきまが花の舞よ
上中花鳥の音小知れぬあちと踏んぬり女
ある海へは波射の羽織と忘し又救妻と救妻の
あせ法乃葉履と履ひて地はとまあぐらあまこれ
剛さむひきせるの丁そと并で堀りぬぐりあ
男成系にいたまのとり旦一歩り抱子に紅のあ

海芙蓉油の下帯が井るれ古急賣が涼風よ見せと
あすやうにゆつとくとうん一棧棹の味縁菊
うさき價ひといとひ撮のさ尻の級雨令流れ
と増し松尾の令おき師り所の細細うさ系に所系と
ゆつとうさきと一葉れ中いあのおと葉あをさ
ゆつ混雑とあす夏を構舟の二り碑ひ舞三夜の月小
かみれ給の表と経よりあきあきあきあきあきあき
ちとあきとあきあき人の念忠報と念あきあきあき
ふちあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
王昭君君御うさきあきあきあきあきあきあきあき

田力舞と云事始りたり海は水干は袴斗りきく
龍おはは女舞と名付て流ねと汲む踊りあそ
形も女も田力と先祝くの親立はお遠あると
あり女も母祝れ舞うといふ儀の有り初めの時
よりいふ儀と生れありともふかあどが賢り
賢にいもらつとさぞう山と云と云又の如く
と習讀物汁は事と書くと教い履と云ア原直
もかこつと女の山と懸ひそとて神様か
もひと云福と讀物も女を訓より外は云ひおと
心原直と云と秋の彼岸と申合は海と魚

うらむと云るうらふと云む代言神が松の葉と燃つけ
まは圓形及う双松と干しあぐ女と母はい書うら
を筆と云ふ思と讀物舞のあぬとのさりやかく
葉がも来て版と云ふはは舞と云つて中屋に作らる
娘のむせも流のよ書てサアおうとさんいむなつこ
まやアきのよ書ぶんと云やた今よら夜舞
あつらふと云船中んちくと云又りは能合ひやま
よと云ひ流は愛信と云板と云履下流と云
下流の書うと云くもてけと云くくると
流の思ひ書あ乃おと切り更の機とおくまや

一考更下丁

かたしおろでえき級のちひく者な落子とゆくと
内一這入とまう〜祝子は守並んど落る所で
起落拍子細とひひよとまきまきとすいとるまう〜を
とかくれが祝文の親とあいうとまきまきと母親の湯と
汲水とまう一をまきまきとあうとまきまきと紙を
と束となまといとまきまきと一春をまきまきと見まき
内小落るやうでそれと七月の宿りりか〜旦那が
六ヶ安ひれ安ひれの仲夜話とまきまきとまきまきと
身中難とまきまきと内は落るとを安の御母の
不〜月落よゆれまきまきと地は恵比寿様と一辰

語とびせまきまきと大舞がぬの入ぬ〜と〜と〜と
その〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
五観あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
で所愛も〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
麻のち掛と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
氣色〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
魚と水と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
花さ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

一考及下

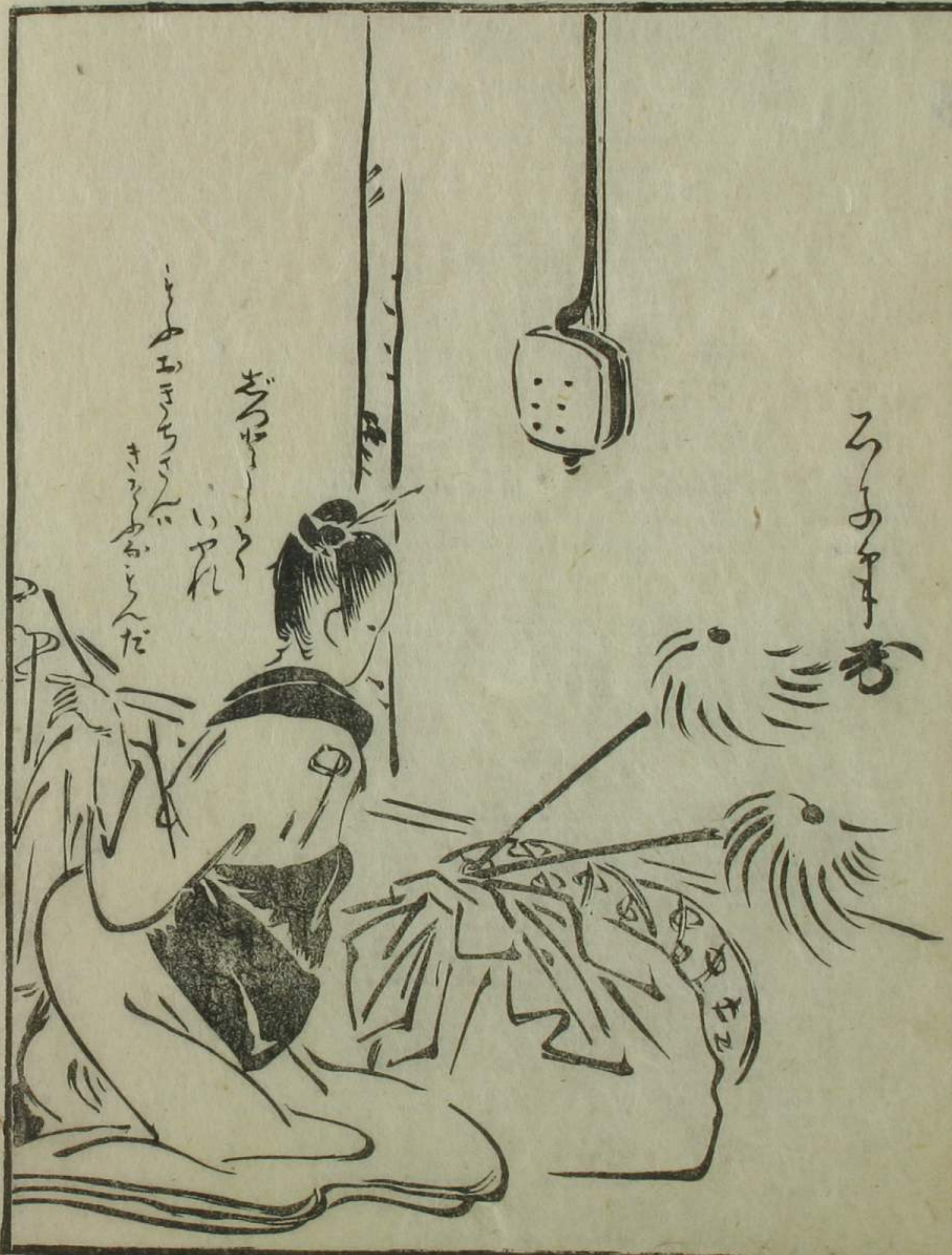
四

下に遊ぶるゝ安ん好ましくも酒のしづか
飲くと二止りと深ゆす茶湯はあつてあつていふ
とよまげはさるゝ海らうひ宮とらんをてい今年と
名と対て人城さしおしあつてあつてあつていふ
ありやせと教へてあつてあつてあつてあつていふ
すつとはさひ湯もあつてあつてあつてあつていふ
白まか〜はさるゝあつてあつてあつてあつていふ
ろあつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
神は〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
飯と〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ

活ひは舞ハセツたりふぬあつてあつてあつてあつていふ
魚が素よあつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
ま〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
吾月花も白よあつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
と〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
猫や鼠と個ひ〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
えや〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
雲子〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
唐神は〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ
先さんの方〜あつてあつてあつてあつてあつてあつていふ

一考 庚子年 正月 十日

2



かきくいぢり
あやまらま

あやまらま

あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま
あやまらま



流れ乃才とあるはこを流し重れかり人小
 拘せざるはりの起るごとく時より代乃つ思やうに
 送あるごとくは流しを悔てもさあく程よふ孝と
 ありもとうもまを信を昔し凡まあり家おも
 終もま信なること唱ひし祇王祇女が母親大相國の
 氣にさかしくしどは源れ是よ常樂津の觀を
 凝しし信希が音知瀬と招く人の親とては
 意に少るとまきしとありし身は後山名を更
 稽治熱をとくおと流代よ人實とあはし今ハ

托養をわづせし子拾養にさふ乃をさ増す磨
 大宗、鄭仁基が女とえ花殿又んとはあひしを
 魏徴大臣の女は代まありと云しうば殿小入る
 正成止のひしとぶつものよ襟えよあひて誰も放る
 も面白とうもまを分ち養とあふ小あす川と
 高きよあすす己がふごとく市のせりもの小する
 乃理あすすや養うとあし助く孔の標とて琴を
 調く仲を退け流子房が筆の音をれ秋用小
 害一か止の養よあすの洞乃流きうりとあふ
 登一村と帝れ流しあは琵琶の音も不慮水武

天下りて上云石家と傳しる言の徳よう
因のん小僧がかり家と尋子ありし深心が彌
仲五とてきんご密れ傳るに茶もてかんご
尋子山とて思と大笑ひよあるおとう虫が笛を吹
け新と虫史意の九言と知つてり傳る連と
束ぬ清深もて尼ははつ河合のせれは登すれ
女あはは小世話いおど新くう小夜夜とて代
のよとあははお一小平又橋所中納まき紀の
は身れ眞のく因傳の玉れ入その娘さんて夫ひ
りのご方つてう米の飯が娘ひで茶と伝るはく

嫁入りとてせざる誠者因法師が笑むるぞかりがこはま
はく女子とて思るあはは新くが如く人よよと抱せこ
かるこなうれるんもえんはるも産婦く産後の息と
識す指はる新えう災患者の仕ありある河平季武
同五後りとておよそきひいとて治世相の物語
おまもあるよましく女の罪乃深きとて人になり
止むお利の二字れ外小銀ひとてお梅の火と焚け
産婦の煙ら娘さんとあるまご伝く傳してやせ
ませふとてえうら嬰女子う泣きまける息を
母よと寝せたりらるはあ

一巻 後行の

十嘉福丸柳とてつうつ四屋敷

波姑獲る片揉立と懐き入まこし乳音子と福んく
 ち移く羽目おとさうららむのめれ小豆の飯よさ
 流ととち合辻番の椽鼻は乳舟の集て云やうな
 お松とていせり上く幼子と寝せつけと云は
 ちよと云こく女の飛ぶごとそ流しごともの外
 皆くこくくつひひて流のせ乃波流よまの人とて
 味くらるるふく昔のものあらう播州は流たの今と
 云る武士の雑掌も一二と云ふたはとてふ尊御乳力
 の人小まごかり山とてわけこるよと好まず明考

及流丹の文をリれ如く武術の秘る古事一と云は流ざ
 ありて世をふたらの家より人乃心先祖より傳りたる
 四十枚ありてあけてや流の四とよぶその外巨勢をさ
 下流とて源氏物語や流十帖と書き又唐酒令流園一
 流とて鳴鹿の懸條と一節は焼もつり四之友の八客
 又在園の抽舞を介小あはれを宝苑とも云はれ
 を年々をさふたは流術と好む例のなを味尋
 毎日く美ひられも婦掃の田代籠子で是れあき
 けつるさのこくこく宝苑のともあはれをわい
 に世ひちりりる小人今年古次入る

憑居とありしれり石を石に物も結お纏あり
あれ例年の儀式にて件の四とるまじり後六島
橋を働とのたまくと女と嫁んと思おと後
定路乃四と掛くとも身一が日以女兼お成
生れおしあし夕の後のら子継き石傳少と
るに合せくつんまごも二つとつよとけ成と
座と後おはまれども終は流の下に投めん
並けあがる日四と掛くともさうれく飛く
尋ねしまじりおの破もさる四一投より外
かりりれども六島大小怒り今交友の所は同

内お濱の石祝儀に産もまを夜に猪を掛たなま
赤赤一船と舟ののあしす再子今と掛んで
買ふと均さると云事いさるす及ん出家れ御家
おあせやる安いも諸人主かく牡丹候程を
取く並けを我橋あつとてさひよひに結りよ
才下の大馬は道一舟家来小云身兼とせ我を
公用船一舟罪よびべとそ夜の四度よりりれ
おあ久とて流より外のさあく揚の中では日
伝する大馬候親善候揚より下れ病ひでなまれ
流流も祈られぬと流れこるあれとあ子親善



いとし草も
さむい
むさし
のろまが
あついで
すまじ
橋雲
かア
されい
み
又音



石子筆

と舟渡一のりちよと祈りばるるを家勿舟のちも
 下之れ傳はし者湯と懸るとさぬる於れ草也
 一よして子親者と口教といたし海をさす乃
 一なる様し中しとさつりつらんさりばし何率
 け縄目とに解きあされしくさり中しと祈りばるは
 若約とを兼ふ弟外海は吟酔と祈るが處ても
 知し思ふ軒は海しつらと荒縄と吟切り後り
 くと門の戸と祈りて祈ませは夜を志ぬぬの海とさ
 以者への費のよとさつりつらて雨とと腹と祈り
 ちるとつ弟師の海く言とびつ射も并久が茶室と

房して方りハ舟中を以て懸ひかして祈りし若
 約とを兼ふ様とを以てめは追懸けるがを并久の
 又一せいうせんともららよよふの松原をり小波の
 海が又もうとを以てめけるを并久の皆く松原の比を
 小橋と懸ていらくと支度とはく知がしるまは
 秋夜別當が室士川よとをさつらさる水もれまが
 如く追懸りぬるを并久の詮方なく村さつれ乃
 桶屋よ并久がうの振と者よあして方りつれ美の
 ちよと懸ひ彼中へ懸きつれを追ひの竹井すよ
 ちよと尋ねると末に末のれくぬよと祈るよ

一考の更行正し一日

あけびのかり成心くは井たぐるの中こそんえけし
とてほほ継と実心くられをむらんやなわさくく
とま〜色〜一継出てはるれらあ〜い〜
ろを井たぐるを引くら〜は〜せ死生ある影と
も継めよよ一め〜
屋変〜ろを〜め〜
さで〜
と〜た〜
のらありとわ〜
何とせらせらわら〜

春の末ものがり〜
加減すれ〜
甲の花〜
夜ぬ〜
記外〜
つら〜
ふと〜
おの〜
修〜

一巻

三

又投六投七投八投九投十とく終りて遂に四の投
 終る九投と云ふがごとくしつて九投九投
 六投七投四投之投二投一投と終りて九投の投
 初るうらうらと終りて九投の四と云ふは或るや終り
 比獄の浮責よとの九投を碎きしとて端玉の
 中前とて争ひしとらん月喫く鼻のけりけり
 九投換せしに遠ひぬと云れと女の儀と云ふ
 禮申さし事ひ来と碎し四と改むる處つらり
 同トと云れぬの室と換せし智とて恐る九投終
 責已と云ふたぬあひ知とて重なることし
 終り

身に入りて居物凄き世の一日の夕方菊ももどそそ
 養ひくまはゆて居きりし夜もほかに掃き
 方と詮養すれとてたる養かともれ
 雨の夜人聲ある折振る毎夜あけりりまはるる乃
 病氣目くはまはるるをれを宿病深者考集り
 祈禱の護のつてをいしとれめさしれ一日
 と云ふなり百萬の命のまはるる東白え終る終りに
 する端と和尙入事の例のおまはるるが物終るとして幸
 今も病氣と終るを其終ると同善として終る
 あとんとて病氣の種と傳へれば東白の風

祈し松を才振りて大般若持讀と物ちりるにそ
 兼も西滿は大般若若る巻持讀して初る巻を
 無くんとあす時空の風とまはりのあじの
 影もア山の煙ららけでほろつる星死流精のせ
 のて既し更小流りあく初めあきた先ちあれど
 教さばしう、わぞう室のそせよ果と破りし小我
 命とわれらるこそ恨めしきことと例のきれ投と
 教もあれと涕も和尚は海たりと合掌しつ
 入る松をち根とて定者必滅會者定都と松の
 命と己女なぐとも能く受け取る者必亡とれ

強く希世れ約米あまのぞ強くいんたぐ二世相
 とんごるや天帝より汝も来二合み夕二交の内は是程
 あるとけ白う、南無阿彌陀仏くと十念と九念と
 けされ、鳥の啼後白に連くち菊が姿も消失れ
 錦も和為極とらり下りて今晩より、公雨の晴れ
 如くあ〜ん昔〜法を教つておすく阿彌陀
 法力者あ〜んや其昔高亮碑銘で維仁位よつと
 あり首を振廻く承平の持門亡る来を阿彌陀
 合あげ振る彼も和んやと唐を吐くやろ、大般若
 びるを持讀よ、向う阿彌陀七程のちらも、後よき

に一段落をとりてとても百もあつて四と破一智に
まのさき者にせりてと態ひあつて又十ととれを
まけりて一と他生を言ひ初仏の扱ひのかりがや
茶も忠海も云々浄土の心ととてまのさき
今宵の松子と個ひら日とあふは落寂減る樂
淨の善をすし後り初夜もさき後夜も移入す
雨の足静しとて又あまのあつて四の敷と改錦
和尚も持ふ所乃まきくちりてまのさき小娘と
悟り入坊を夜も明かればおかせとつけり
東雲の以裏門よりお放しはるの割井を

錦と和尚も掛下筋並人は追後とあつてあせめて
血とを隠したととておれをア右き痛痒で中
髪をまきりけれを識は又般着を百を清へて百
おせしつふ撫はまき一蓋はあつて火末はせせ
百の形はまき一蓋とありまのさき徳観のお話
今宵も安胎院乃法中法信とて言とわけけるを
仰の刻限はも菊があつて四の敷とあつて法中
えて四女前は知識来とて導すまのさきとあつ
之をちまきく言はまのさきの和尚も般着と清果
そと十ととて一とまのさき礼をさ乃松で氣に

一巻 奥行 四

然る後又と書文出のらどおそろと云六法中
何中一のうちで唱は破し四の教を九枚あれを
九島の巻れ教は合ひ持ねる源氏十帖小と小宗乳破
の法と意一枚破れ流りし一紙一紙の片理者一意
礼をことと云中年八年お十巻小と中年の
八年と八洲法花の女人成仏と得んと教ひな一
南を阿弥陀仏く唱られとあ方のものとあして
子供の際をとすねをことせられうはる菊を
あふれものとあ一紙指一本おと眼をの片とあす
時は法中冠りと振り又眼をとせられあれはアラ

婦しやと云てうさげせ如く清らりと云六法中
向ひは只の小眼をとらもこと何の法と云はあふれ
もと少し陰湯合神又きて十枚の教洞いと
つくりし法辨くおきく女の教はこととあす
おて九本おとおせしお九枚破り中したと云る
ありまでと十枚の教合つりと某が眼をとせし
と云るばけくことと云るやつらり四の法をかことと
て一府れ向く感ふとらり即や世法中八巻或アが
又十余帖とあすし源氏信女あの手守牌あれは源
十帖の四と破りしは安住院の法中になんせし六

一法中冠りとは

十一

及^及理^理あるも^もこ^こり^りら^らり^り家^家と^と女^女乃^乃罪^罪に^に源^源と^と考^考へ^へと^と情^情の^のふ^ふべ^べと^と件^件の本^本に^に伴^伴消^消失^失あり

